

平安京左京北辺三坊五町出土の宮竹屋の薬盒

加藤雄太

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

平安京左京北辺三坊五町出土の宮竹屋の薬盒

加藤 雄太

1. はじめに

今回紹介する資料は、当調査研究センターが1986年から1987年にかけて実施した府民ホール（平安京跡左京北辺三坊五町）で出土した薬盒の蓋である。平安京左京北辺三坊五町の調査の資料報告は報告書の他に伊野近富氏による「みぞろが池焼」に関する報告と、葵紋の京焼と「禁裏御用品」および「府廳」関連遺物を扱った拙稿などがある。調査地点の所在地は京都市上京区烏丸通り中立売通り上ル龍前町・東町にあたり、弥生時代前期は内膳町遺跡、平安時代には内膳町が中立売通り向かいの南側に営まれていた。当地はその後、里内裏が東辺に置かれ、中世後期にも連綿と人々が暮らしを営んだ。天正14(1586)年には秀吉の聚楽第造営にともない多くの大名屋敷が建てられ、金箔瓦が葺かれたが、文禄4(1595)年に聚楽第は破却される。寛永16(1639)年には半井盧庵が住まいし、元禄年間(1688～1703)には「松平スルカ守」、寛保元(1741)年には東園家、勤修寺家が調査地付近に居を構えたようである。また、延宝6(1678)年には京焼の一種である

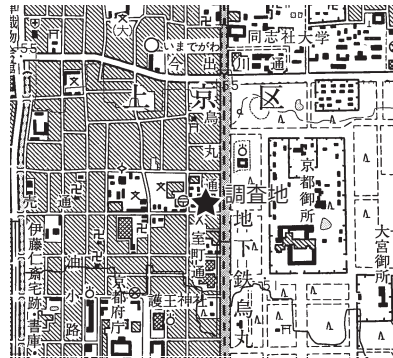


図1 調査地位置図(S=1/25,000)

1.調査地 2.内膳町跡 3.一条大路(地下鉄烏丸線) 4.石垣溝(地下鉄烏丸線)
5.内膳町遺跡(京都府計量検定所) 6.内膳町(京都府保育所)

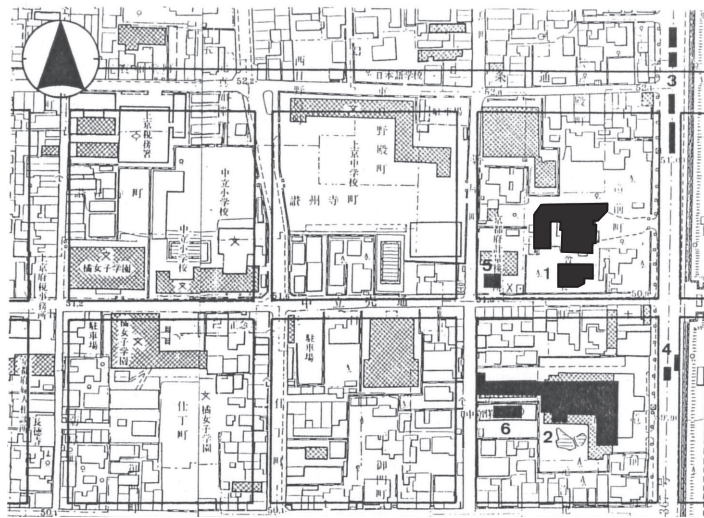


図2 調査地周辺位置図(S=1/2,500)

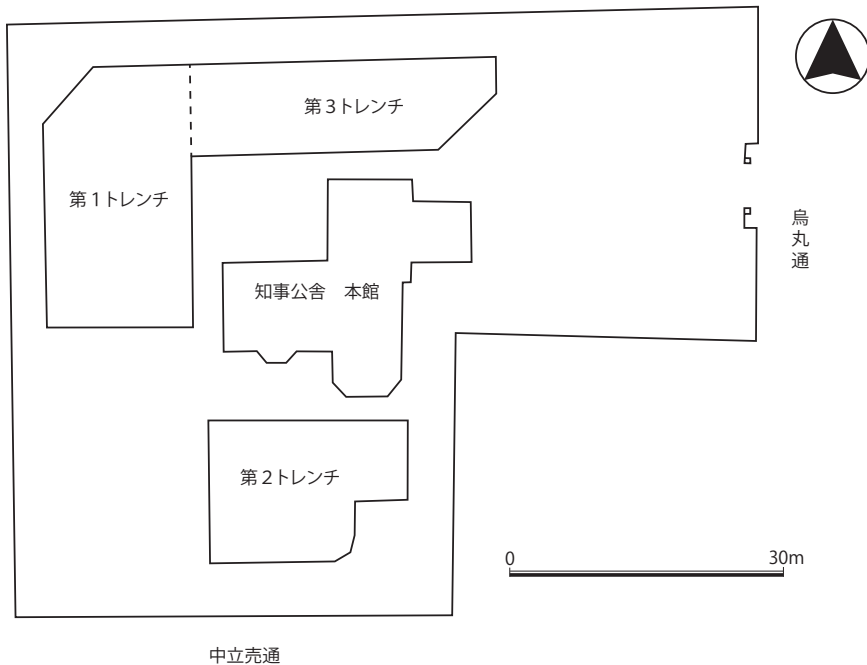


図3 調査地トレンチ配置図(S=1/800)

「みぞろが池焼」の内窯があったという。

2. 磁器製の薬盒について

本稿でとりあげる資料は第2トレンチのSE814から出土した磁器製の薬盒(図5-1)である。約4割が残存しており、蓋の表側には三行分の文字が呉須で記されている。「□雪 □□萬病圓 □□圓」とあり、蓋の裏側にも三行分の文字「州」、「亀田」、「加」が呉須で記されている。残存していない部分などがあるものの後述する情報から補完すると、表には「紫雪 耆婆萬病圓 烏犀圓」、裏には横書きで「加州」と縦書きで「亀田」と判明した。「加州」とは加賀のことであろう。この遺物について調べてみたところ、どうやら加賀の宮竹屋という薬種業を商っていた商人が扱った三味薬が「紫雪 耆婆萬病圓 烏犀圓」といわれ、これに関連する遺物であることがわかった。

3. 三味薬が加賀藩から宮竹屋に至る道のり

薬盒の蓋に記されていた三味薬は朝鮮由来の薬のようで、その調合法が記された『朝鮮版和剤局方』が文禄元(1592)年から翌年にかけておこった文禄の役にて宇喜多秀家より持ち込まれたことがきっかけとなっている。その後、宇喜多から医師の曲直瀬養安院正琳に



図4 平安京跡左京北辺三坊五町平面図(S=1/400)

書が寄進され、正琳から徳川秀忠の手を経て、家康のもとに渡った。この『朝鮮版和剂局方』を元に家康は製薬に勤しんだようである(小林明1995)。

慶長4(1599)年、前田利家没後、家康の勧めで金澤に帰った利長は翌年、謀反の疑いをかけられたため、実母芳春院を人質として江戸に送り、養嗣子利常と秀忠の娘珠姫に婚姻関係を結ぶことで事態を収拾した。その後家督を利常に譲った利長は隠居する。米澤氏は朝鮮由来の三味薬が揃っているのは江戸と尾張徳川と加賀前田のみである点から、この時の珠姫とのつながり、入輿が契機となり加賀に三味薬が入ったと考えている(米澤2011)。

この三味薬は加賀藩に伝わって以降、藩の秘薬であるが、金澤薬種商の福久屋、中屋、

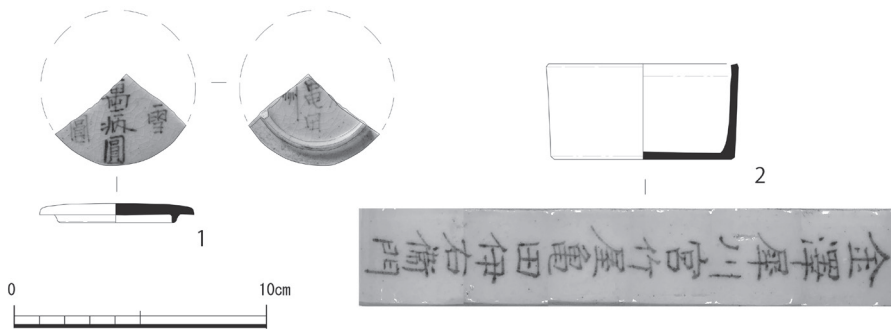


図5 薬盒実測図

宮竹屋の三家には調合法を伝授している。加賀藩5代綱紀は寛文10(1670)年に藩典医堀部氏を通して福久屋に伝授し、同年中屋にも伝わる。その後延宝2(1674)年に宮竹屋に伝えられ、以後三家のみが調合を許された(米澤2011)。

4. 宮竹屋のこと

この加賀藩の秘薬を伝授された宮竹家とは、どのような家であったのか、累代をかいつまんでその概略を確認しておきたい。なお、詳細に関しては米澤氏の研究が詳しい(米澤2011)。

宮竹屋の初世は喜左衛門教正である。天正12(1584)年生まれで、宮竹屋と称して旅人宿の本陣を務めていた。その後、宮竹屋本家二世喜左衛門道喜から薬種商がはじまる。その後の延宝2(1674)年、本家二世喜左衛門道喜が加賀三薬を家中病用のため調合を加賀藩に願い入れ、薬が伝授される。このことが契機となり加賀三薬の調合販売がはじまる。なお道喜の次代は長男勝則が薬種業を継ぎ、次男武富が分家として手判問屋(旅人に関所を通過するための手形を発行する旅館)を営むようになる。また、勝則より「伊左衛門」を称するようになる。「伊左衛門」は、同志社大学で出土した薬盒に記されている(図5-2)。

その後、宮竹屋は本家六世伊右衛門勝延の安永6(1777)年から薬の領外販売をはじめ、分家方の長男で分家四世であった七世伊左衛門純蔵の頃より京都で宮竹屋の評判が知られるようになり、文政11(1828)年に本姓「亀田」の使用を藩から許される。

5. 宮竹屋と荻野元凱と磁器生産

宮竹屋純蔵が活躍していた寛政7(1795)年9月、金沢出身の京都の御典医荻野元凱は加賀藩10代藩主前田治脩の病気治療のため金沢に来ていた。荻野が金沢に滞在している頃、彼をもてなすため、金沢町片町の鬢付油商の木倉屋長右衛門宅で宴席が催されることとなった。宮竹屋純蔵が参加したこの宴会で宮竹屋の加賀三薬を荻野元凱に認められたこと

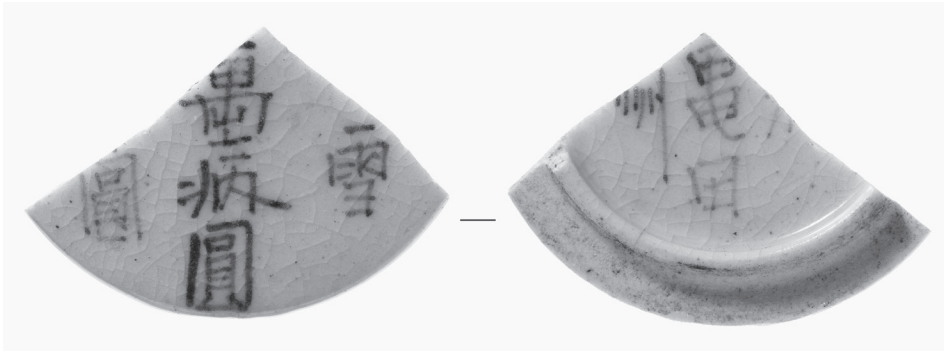


写真 宮竹屋薬盒蓋

がきっかけとなり、萩野が帰京した後、宮竹屋製造の加賀三薬が京都の鍵屋を通じて広まったようである。また、この萩野を介しての京都の文人ネットワークとのつながりを得たことで後年、金沢で陶磁器製造を始める際に青木木米を招聘することができなかったのではないかと米澤氏は指摘する(米澤2011)。

青木木米が加賀で陶磁器製造を進めた春日山窯は、文化4(1807)年冬10月に加賀藩士富田景周の『箕柳祠碑文』と文化5(1808)年4月18日の条、加賀藩町奉行津田左近衛門が記した『政鄰記』の「具申書」に経緯が記されている。それによると宮竹屋純蔵が文化2(1805)年11月に粟田口の陶工青木木米を訪ね、金沢への来訪を勧めた。その後、築窯に向けてのやりとりを通じ、同年10月に河北郡山ノ上村領内に窯場地点を選び、古い窯を買い上げて新窯を築く。これが春日山窯である。春日山窯は宮竹屋分家の喜左衛門と黒梅屋平四郎が窯元となり、磁器生産を始める。

しかし、翌年の文化5(1808)年正月に金沢城二の丸御殿からの出火で城内の建物が焼亡したため、建物の再建が始まるが、この再建費用のために春日山窯への補助が打ち切られ、木米の待遇も悪化し、木米は帰京する。この後は文化8(1811)年9月に木米の助工であった本多貞吉が春日山窯から若杉窯(小松市若杉町)へ移るが、天保7(1836)年に火災で焼失したため、八幡若杉窯(小松市加賀八幡)に移転する。九世亀田伊右衛門敦志は天保7(1836)年以降、八幡若杉窯にて磁器製「薬盒」の製造を注文しており、薬盒が生産されていたことがうかがえる。

米澤氏によれば、『亀田旧記』第2冊内記事に薬入れに言及した記録があり、薬が紙に包まれていたと指摘している。また『亀田旧記』第4冊の記録から、尾州の小見山家に習い「包紙」を改め、「能書」を萩野元凱に「相願う」こと、薬を「錫香合」に入れること、包み紙が道中破れないように上箱を付けることが記されているという。これらの内容について、その後の寛政7(1795)年には実行されていることがわかっている(米澤2011)。

嘉永2(1849)年の記録では、加賀藩経由で紫雪を御所に納品している。その際の容器の候補として錫香合、ギヤマン、焼物を提出し、藩から錫が選ばれている。ここでは「焼物容器」と記されているが、これが宮竹屋の磁器製薬盒であると米澤氏は指摘している(米澤2011)。なお、文中に現れた「焼物容器」である磁器製の容器は小松市の若杉窯からは出土せず、八幡若杉窯で出土している。八幡若杉窯の製品は、素地が卵黄色、「不規則な貫入」が入るものが初期の製品で、黒味のかかる呉須が次第に完全な磁器製品となるらしい(高橋勇1958)。府民ホール地点から出土した蓋はこれらの特徴を有しており、比較的初期の所産であると考えられる。

ちなみに加賀で薬盒が生産されていたのと同時期に肥前の「烏犀圓」薬盒の出土事例がある。肥前産の薬盒は加賀の薬盒と比べて蓋の断面形、身受け部の形態と器高が低い特徴がある(小川 望2020)。

6. 加賀三葉の薬効

薬盒に記されていた加賀三葉の薬効についてもまとめておきたい。なお、薬盒の効能については、米澤氏がとりまとめたものを提示する(米澤2011)。「烏犀圓」は56種類の薬種からなる薬で中風、動脈硬化に効果があるとされ、はちみつで練られた薬である。「万病圓」は8種の薬種からなる薬で、腹痛に効果があるとされる。または、婦人の血病、月経淋閉、月経不潮などに効果があるという。「紫雪」は正保4(1647)年刊行の『太平惠民和剂局方』巻之6に黄金壹百両(金のコロイドを利用)を含めて17種類の薬種で製造されていることが記録されている。明治8(1875)年「賣薬々方明細并効能書」には16種類の薬種と黄金水で製造されているとある。効能は脚気、天行、傷寒、霍乱或る小兒驚風瘡毒又ハ魚毒等ヲ治ス」と記されている。

7. 出土地点と蓋の年代について

薬盒の薬を製造していた宮竹屋とその磁器薬盒の来歴が明らかになったところで、発掘調査の成果に立ち返りたい。残されている調査の原図を確認したところ、SE814は第2トレンチの南西部に位置することが分かった。写真から判断すると、調査に取り掛かったレベルから一定の深度までは石組が残存しておらず、上層は近代の遺構がかかっているようであるが、下層から4～5段程度の石組を確認している。薬盒が出土したのはSE814の1mから2mまで掘削した層中からである。共伴遺物は図化していないが、赤く変色した瓦や近世瓦の瓦当、近代の美濃磁器、関西系陶器、肥前の端反碗などであるが、残存状況は良好ではない。また当地は嘉永7(1854)年に焼亡しているので、被熱痕のある瓦などは

この時に罹災したことを示す資料といえる。限られた状況から判断するに井戸が廃棄された時期はこの火災の年代と考えて差し支えなからう。また明治17(1884)年にまとめられた上京区地籍地図を確認したところ当地は「官三宅地」となっている。当地は東園家の屋敷地範囲外であり、天保2(1831)年と慶応4(1868)年の改正京町絵図細見大成では詳細なく判然としない。

薬盒が生産されていたのが、八幡若杉寮が稼働し始めた天保7(1836)年以降で、井戸が嘉永7(1854)年に廃絶したと考えると、この薬盒は1836年から1854年の18年間に京都に入ってきた製品であると言えよう。

今回取り上げた薬盒以外の京都における宮竹屋の薬盒出土事例は、同志社大学校地学生会館地点(図5-2)と合同会社アルケスが調査を行った平安京左京三条三坊五町跡・烏丸御池遺跡があり、今回取り上げた府民ホール地点の調査からの出土は3例目ということになる。また、石川県下に伝世品が一点、残されている。烏丸御池遺跡の資料は盒子の身は内径6.8cm(大)と8.0cm(特大)が入子状に出土しており、石川県に残る伝世品(口径5.8cm)よりもいずれも大きい。盒子は「金澤犀川宮竹屋亀田伊右衛門」、蓋に「三味薬調合所 加州」裏に「亀田」とある。同志社大学のものは大サイズ(7.2cm)の身で底部に「□□三十六□」と墨書がある。なお今回の府民ホール地点で出土した薬盒の蓋は復元口径約6.2cmと伝世品に近い規格であった。薬盒には複数の規格差があったことが確認できる。

8. まとめ

本論では府民ホール地点から出土した薬盒について報告した。米澤氏によれば、宮竹屋の「加賀三味薬薬盒」は贈答用の特注容器として製造され、江戸後期に金沢から京都に持ち込まれていた製品であるらしく、数が少なく貴重な出土事例であると言える。また、宮竹屋の薬盒を作ることとなる経緯は再興九谷にも通じている。宴席でのめぐり逢いが今日のあり方にも通じる大きな契機となったことは歴史の興味が尽きない面白いところである。

(かとう・ゆうた=当調査研究センター調査課主任)

謝辞 本論を執筆するにあたり米澤義光氏には多大なるご支援を賜りました。同氏には多忙な中、当センターまでお越しいただき、実物を実見の上でご指導賜り、ご著書をはじめとする関連資料の提供までいただきました。心よりお礼申し上げます。

参考文献

合同会社アルケス 2019『平安京左京三条三坊五町跡・烏丸御池遺跡』アルケス発掘調査報告2

- 伊野近富「平安京左京北辺三坊五町発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1988
- 伊野近富「京都市内出土の近世陶器」(『京都府埋蔵文化財情報』第68号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1998
- 大塚 隆編1994『慶長・昭和 京都地区集成』柏書房
- 小川 望2020「『烏犀圓』の「生産者」-現存する薬舗「野中烏犀圓」の製品-」『江戸遺跡研究』第7号
- 加藤雄太2019「平安京左京北辺三坊五町の葵紋の京焼について」『京都府埋蔵文化財情報』第135号(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 加藤雄太2019「東園家邸跡出土の禁裏御用品-平安京左京北辺三坊五町の調査成果から-」『京都府埋蔵文化財情報』第136号(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 加藤雄太2021「上京警察署と府廳のうつわ」『京都府埋蔵文化財情報』第140号(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 加藤雄太2025「平安京跡左京北辺三坊五町の近世公家屋敷地範囲」『京都府埋蔵文化財情報』第149号(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 小林 明1995『久能山東照宮博物館100選』久能山東照宮博物館
- 高橋 勇1958「陶磁器 若杉窯」『加賀の工芸』石川県美術文化協会 pp.27-28
- 同志社大学歴史資料館2005『学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書』
- 内務部第二課1884『上京区地籍図 自16組 至20組』
- 米澤義光2011『加賀ノ国 金澤 犀川 宮竹屋-金澤の豪商宮竹屋の茶会記(器・料理・御菓子)と宮竹屋純蔵が招いた青木木米開窯の春日山窯について-』